

# 算数を軸に全校で指導を統一し、 児童の学力、教員の指導力を向上

埼玉県三郷市では、複数の学校で、若手教員の増加に対応した「教員の指導力のさらなる向上」が課題となっている。その解決に向け、学校全体で指導方法を統一させて、児童・生徒のつまずきの解消に力を入れる学校が増えており、授業の成果を測るために、市内全公立小学校の高学年を対象とした「学力検査」を実施している。ここでは、算数を軸に、全校で指導の統一を図っている2校の事例を紹介する。

### 事例1 ひこなり 三郷市立彦成小学校



© 1873（明治6）年開校の文靖・造養・  
 培殖学校が前身。体育科教育の研究校を  
 38年間務める県内有数のスポーツ先進校。  
 校長 森 雪広先生  
 児童数 574人  
 学級数 20学級（うち特別支援学級2）  
 電話 048-952-1265  
 URL <http://www.edu.city.misato.lg.jp/hikonarisho/>



校長

**森 雪広**

もり・ゆきひろ

「子どもたちが知らず知らず成長できる学校をつくっていききたい」



主幹教諭

**高橋 史行**

たかはし・ふみゆき

教務。「先生方がよい意味で競い合うような学校風土を築いていきたい」

### 若手教員の増加に対応した 指導力のさらなる向上が課題

埼玉県の東南部に位置し、東京都にも隣接する三郷市は、つくばエクスプレスの開業などにより人口流入が進んでいる。「日本一の読書のまち三郷」を掲げて読書活動を推進するなど、公立小学校の学力の向上は著しく、文部科学省「全国学力・学習状況調査」では全国平均を上回る。

そうした中、複数の学校で課題となっているのが、若手教員の増加に対応した指導力のさらなる向上だ。団塊世代の退職によって20代教員の比率が高まっているが、ベテラン教員の指導法の継承が進んでおらず、学校全体の指導力を維持・向上させる難しさを感じていると、三郷市立彦成小学校の森雪広校長は危機感を募らせる。

「若手教員が増えたことで学校に活力が生まれ、児童と触れ合う時間が増えました。一方で、板書や発問の仕方などのスキルが十分でない教員も少なくありません。ゆるやかな世代交代の中で自然に受け継がれていた指導法が、団塊世代の大量退職によって途切れつつあるのを感じます」

### 学校全体で宿題→チェック →補充のサイクルを構築

そうした課題に対応するため、複数の学校で全校的な指導の統一に着手した。教材やテスト、宿題の確認、つまずきの解消まで、学校全体で指導を統一させて、指導力の向上につなげようというものだ。

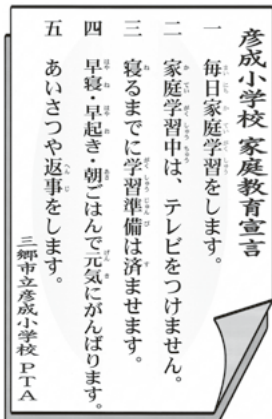
同校では2016年度、全学年でベネッセの小学校ドリル\*1と小学校テスト\*2を導入し、宿題→チェック→補充学習のサイクルを構築した。小学校ドリルのダウンロードプリントを毎日1枚、宿題として課し、家庭で取り組ませた上で、翌朝8時30分から10分間の「宿題チェックタイム」で答え合わせと解説を行う。宿題未提出の児童、誤答の多かった児童は、2・3時間目の間の休み時間や3・4時間目の間の15分間の休み時間で同じプリントに取り組みさせる。それでも終わらない児童には、放課後に15分間の補充学習を行う。この宿題チェックタイムは、家庭教育力の向上もねらいの1つにある（図1）。

「本校は140年以上の歴史があり、保護者や祖父母も本校出身という家庭が珍しくありません。そのため、

\*1 教科書に対応した基礎・基本の定着から応用力まで身につけられるドリル。「ダウンロードプリント」「かくにんショートテスト」「ドリル検定」「さかのぼり系統図」などが付属教材としてある。

\*2 教科書に対応した基礎・基本の定着から応用力までを測るテスト。「単元テスト」「プレテスト」「復習プリント」などが付属教材としてある。

## 図1 家庭教育宣言



PTAの自主的な協力で始まった「家庭教育宣言」。同校は、学年プラス10分間を家庭学習時間の目標に設定しており、学校と保護者の二人三脚で進めている。  
\*彦成小学校提供資料をそのまま掲載

学校の教育活動に協力的な半面、学習については学校に一任しているという保護者もいます。宿題のチェックを確実にすることで、保護者の家庭学習への意識を高めるねらいもありました」（森校長）

ベネッセの教材を採用した理由には、ほかのドリルに比べて問題数、記述問題が多く、安価なことが挙げられる。また、三郷市では毎年12～1月に、全公立小学校の5・6年生を対象（1～4年生は各校の自由裁量）に国語・算数の「学力検査」を実施しており、2016年度からはベネッセの「総合学力調査」を導入している。そこで、日々の宿題もベネッセの教材を使うことで、練習を兼ねる意味合いもあった。

宿題チェックタイムは、担任が授業の成果を確かめる機会にもなっていると、主幹教諭の高橋史行先生は話す。

「以前は單元ごとのテストで初めて

気づいていた児童のつまずきが、宿題チェックによってすぐに分かるようになりました。同じ間違いが多い時は、次の授業で説明し直すなどの軌道修正ができ、自身の授業内容や指導法を検証する機会になっています」

## 彦成小学校発の定期考査が市内全域に広がる

同校では児童の学力把握にも力を入れるため、2015年度2学期から独自の「定期考査」を導入した。算数において、教員が教科書の例題を抜粋して作問し、中学校のように中間・期末考査を学期ごとに実施して、定着度を測っている。

また、同校では授業終了時から16時30分までを「放課後活動」として運動や各種大会の練習に充てているが、定期考査1週間前からは「放課後学習」として4～6年生全員に小学校ドリルのダウンロードプリントに取り組みさせている。特に、小学校テストの単元テストで成績がよくなかった児童には、この期間に集中的に指導して学習内容の定着を図る。

この取り組みは校長会で紹介され、2016年度1学期末から多くの小学校で共通の定期考査が行われ始めた。市の教務担当者会で作問担当を決め、各校持ち回りでテストを作成。同時に実施し、結果を各校の管理職が共有する。学校の序列化を生まないよう、教員に伝えられる結果は自校の学年・クラスの成績と参加校全体

の平均のみとした。また、テスト結果は児童の通知表には反映させない。あくまでも、担任の授業やドリル学習の検証に使うのが原則だ。

## 若手教員の学力向上への意識が高まる

定期考査の実施により、若手教員の間で学力向上への意識が高まっていると、高橋先生は言う。

「他校に負けたくないという思いを多くの先生が持つようになったのは大きな変化です。1点でも高い点数を取らせたい、市の平均を超えたいという意識が高まり、学年団で定期考査の予想問題を作成する姿も見られます。回を重ねるごとに作問のスピードもアップしていて、教材研究のよい機会にもなっています」

児童の意識も変わりつつある。懸案だった宿題提出率は、2015年度の85%から、2016年度2学期には93%まで上昇。担任に質問をする児童も増え、学習が苦手な児童が職員室まで質問に来る姿も見られた。

「宿題チェックタイムや定期考査があることで、学習への意識が高まっています」（高橋先生）

課題は、そうした児童の意欲を目に見える学力にしていくことだ。

「本校での『全国学力・学習状況調査』の結果は、全国平均並みの状態が続いています。子どもたちの力を一層高められるよう、先生方の指導力や学習システムの向上に努めたいと思います」（森校長）

## 事例2 三郷市立新和小学校

### 算数のつまずきによる学力の二極化が課題

三郷市立新和小学校では、長年にわたり「算数の新和小」を掲げて算

数を中心とした学力向上に力を入れている。2015年度からは三郷市教育委員会の委嘱を受けて、「アクティブな学び アクティブな算数を創る」を研究テーマに、「新和スタイル」（45

分完結型授業）の展開、練り上げ場面で学び合いの活性化などを通して、児童が主体的に参加できる授業づくりを目指している。その2年目にあたる2016年4月、同校でも彦成小

学校と同じベネッセの小学校ドリル\*1  
及び小学校テスト\*2を導入した。

同校にも若手教員が多く、指導力  
向上が課題だ。加えて、同校には児  
童の学力の二極化も顕在化していた。  
2015年度の埼玉県や文部科学省に  
よる学力調査の分析結果にも、学力  
分布が明確な「2こぶラクダ」とし  
て表れた。課題研修主任の西尾和親<sup>かずちか</sup>  
先生は、こう指摘する。

「算数は、既習事項を用いて本時の  
課題に取り組むことが基本的な流れ  
です。基となる知識にばらつきがあ  
れば、新しい単元に進むたびにつま  
ずきが増えることになります」

学力上位層の児童についても、単



◎ 1974（昭和49）年開校。2009年に  
文部科学省の外国語活動の研究事業、11  
年に三郷市の小中連携教育事業の指定を  
受ける。

校長 中西健二先生

児童数 891人

学級数 30学級（うち特別支援学級3）

電話 048-952-0121

URL <http://www.edu.city.misato.lg.jp/shinwasho/>



主幹教諭

**西尾和親**

にしお・かずちか

教務、課題研修主任。「子  
どもたちが前向きに、意  
欲を持って取り組める授  
業を構築していきたい」



教諭

**杉山雄哉**

すぎやま・ゆうや

課題研修副主任、算数副  
主任、4学年担任。「日々、  
子どもたちの成長を感じら  
れることにやりがいを感じて  
いる」

元によってつまずきがあることが分  
かり、基礎・基本の定着の重要性が  
浮き彫りとなった。

## 「習熟具合の見届け」 サイクルを確立

指導力向上、及び児童のつまずき  
解消のために、同校では2016年度  
に、授業を起点とした「習熟具合の  
見届け」サイクルを構築し、学校全  
体で指導法を統一した（図2）。その  
特徴は、児童のつまずきを把握する  
機会が随所に設けられている点だ。

児童は毎回、授業の最後の2～3  
分間で学校独自の「振り返りカード」  
（b）に取り組む。学習の感想とチェ  
ック問題に記入・解答して提出し、担  
任がコメントを書いて返却する（図  
3）。担任はここでまず、個々の児童  
のつまずきやクラス全体の習熟具合  
を把握する。授業内容が身について  
いない児童には、個別指導でカード  
を修正させ、次の授業についていけ  
るよう支援する。多くの児童がつま  
ずいている場合には、次の授業の冒  
頭で前時の復習を行った上で、本時  
の学習内容に入る。

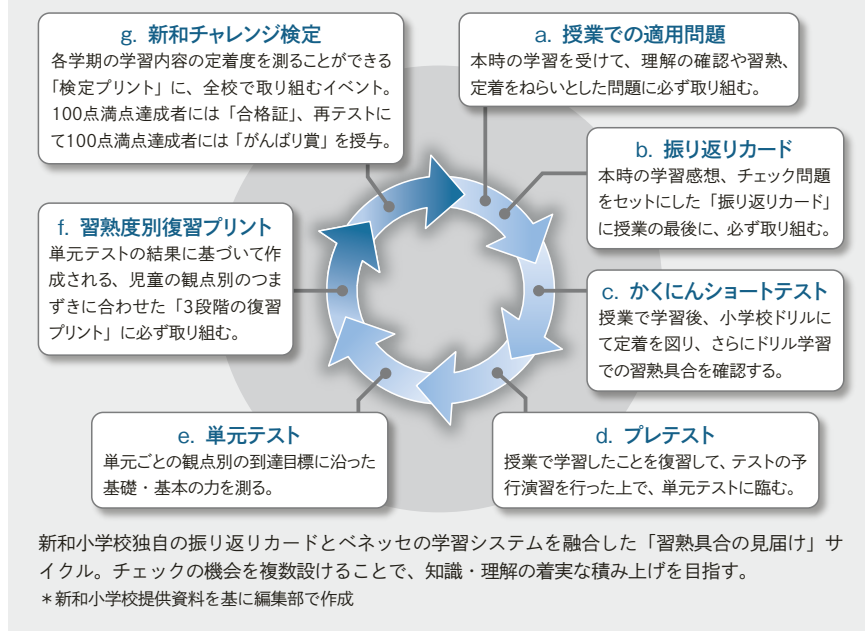
授業後には、小学校ドリルを活用。  
「かくにんショートテスト」（c）で  
基礎・基本の習熟具合を確認して、  
さらなる定着を図る。そして、単元  
終了時には、小学校テストを活用し  
て「プレテスト」（d）、「単元テスト」  
（e）で観点別に到達度を測る。その  
結果に基づいて、個々の児童のつま  
ずきに応じた「習熟度別復習プリン  
ト」（f）に取り組みせる。

学期末には、当該学期の学習内容  
の定着度を測るため、小学校ドリル  
のドリル検定を用いた「新和チャレ  
ンジ検定」（g）を行う。検定は児童  
全員が100点を取るまで繰り返し、  
合格証を交付して通知表と一緒に渡  
す。1回目の検定ではほぼ半数の児童  
が100点を取るが、5回目で合格す  
る児童もいる。課題研修副主任の杉  
山雄哉先生は、次のように説明する。

「検定の実施は、校内にポスターを  
貼って大々的に告知するので、多く  
の児童が張り切って取り組みます。  
『次の学期は1回で合格したい』と、  
自分で目標を決めて頑張る児童も  
います」

校舎内に合格者の名前を貼り出す

図2 「習熟具合の見届け」サイクル



\*1 教科書に対応した基礎・基本の定着から応用力まで身につけられるドリル。「ダウンロードプリント」「かくにんショートテスト」「ドリル検定」「さかのぼり系統図」などが付属教材としてある。

\*2 教科書に対応した基礎・基本の定着から応用力までを測るテスト。「単元テスト」「プレテスト」「復習プリント」などが付属教材としてある。

ことで児童の学習意欲を刺激し、同時に保護者の関心を高めている。

## 全校一斉の「チャレンジタイム」に自学自習でプリントを進める

さらに、すべての児童に基礎・基本を定着させ、学力向上を目指す場が、毎週火曜日の朝15分間、小学校ドリルのダウンロードプリントを用いた自学自習を行う「チャレンジタイム」だ。以前は、担任がクラス全体の理解度に応じたプリントを選び、取り組ませていた。しかし、この方法では、教員の判断によって取り組みの内容や質に差が生まれ、個々の学力に合った課題に取り組ませることができず、学力上位層の児童が時間を持て余すこともあった。

「ダウンロードプリントは、難易度が3段階に設定されているので、児童の理解度に応じた教材を課すことができるとともに、教員が教材準備にかかる時間も大幅に短縮できています」(西尾先生)

プリントの解答時間は1枚5分間が目安だが、児童一人ひとりのペースに応じて進めていく。各学年の廊

下にある「チャレンジBOX」に、単元別・難易度別にプリントが入っており、児童はそこから自分に必要なプリントを選ぶ。全問を解き終えたら、自分で答え合わせをしてファイルにとじる。終了後、すぐに次のプリントに進めるよう、解答は次のプリントの裏面に印刷。自己採点で分からないところがある児童には、担任がその場でプリントをチェックして、つまずきを把握して指導する。

「取り組んだプリントの枚数を友だちと競い合う児童や、自主的に持ち帰って家で取り組む児童もいます。自分の学力に合ったプリントが選べるので、家庭学習としても取り組みやすいのだと思います」(杉山先生)

## 児童が自分で学習を進められるような工夫が課題

児童によって取り組む速さに差はあるものの、原則、単元内のプリントにはすべて取り組ませる。次の単元に入る時に全員の進度がそろって最初から取り組めるようにするのが理想だが、実際には難しいクラスもあり、今後の課題だ。進み具合が遅

い児童については、2016年度は夏休み前半の2週間に「算数教室」を実施して取り組ませた。自主参加の課外活動だが、支援が必要な児童には個別に参加を呼びかけて、1学期間の遅れを取り戻すよう勧めた。

また、児童のつまずきが学年をまたぐ場合は、つまずいた学年に立ち戻って取り組ませることもあるという。小学校ドリルには単元同士のつながりが分かる「さかのぼり系統図」がついており、教員はそれを参照しながら、児童のつまずきに応じて「〇年生のプリントをやってごらん」と伝える。「下の学年に負けるのは嫌だ」と言って積極的に取り組む児童もいるが、下の学年のプリントに取り組むことに抵抗感がある児童もいる。

「学び直しが必要な理由を、児童自身に納得させてから取り組ませることが大切です。チャレンジタイムを通じて、学び直しは恥ずかしくないという意識を浸透させたいと思います」(西尾先生)

小学校ドリルや小学校テストを導入して、「習熟具合の見届け」サイクルを確立できたことにより、積極的に学習に向かう児童が増え、学力の二極化が解決されつつある。ただ、一部の児童はつまずきが解消できていないのが実状だ。今後は、児童が自分でプリントの進捗を管理する方法を検討する。

「ファイルには児童が進み具合を把握するための『チャレンジプリント一覧表』を貼っていますが、自分でチェックするのが苦手な児童もいます。誰もが使いやすい書式を検討していくつもりです」(西尾先生)

併せて、児童用の「学び直し系統図」の作成も検討している。児童に自分でつまずきを見つけ、教科書をさかのぼって復習する習慣を身につけさせることで、課題発見能力や自学自習力を高めていく考えだ。

図3 振り返りカード(抜粋)と3つの観点

### ① ふりかえり「しんわっこ」

3つの項目について5段階で自己評価をさせて、児童の心の中に迫る。

### ② 学習感想

感想は、低学年の児童でも書けるように、4つの書き方の例があり、教員が授業のねらいに対応したものを時間ごとに指定する。

### ③ チェック問題

毎時間、本時の内容を理解しているかをチェックする問題。つまずきがあった場合に気づくことができる。

振り返りカードは、算数の単元ごとに作成し、毎時間活用する。誰でもできる充実した振り返り活動と言語活動を目指しており、内容は教員間で共有している。

\*新和小学校提供資料を基に編集部で作成